

# 保育者の働きかけによって生じた教育実習生の変容

庄籠 道子<sup>1</sup>, 池田 行伸<sup>2</sup>

## Modification of Student Teachers Attitude by Facilitating Supports of Kindergarten Teachers

Michiko SHOUGOMORI, Yukinobu IKEDA

### 要 旨

附属幼稚園では、併免で幼稚園教諭免許を取得する学生の教育実習を受け入れている。実習生の実習日誌を読むと、「～させる」「～してあげる」「けんかがおきないように～した」というような表現が見られた。幼児教育理念と小学校教育理念が混同されているのではないかと感じられた。実習日誌の中でのやりとりや事前指導の中で、幼児教育理念を伝える試みを行った。実習生が記した実習日誌やレポートを調べ、学生の変化の様子を集めた。顕著な変化を思わせるエピソードを6つに分類し、考察した。保育者の働きかけが有効であったことが示された。

#### 1. はじめに

平成18年度には6名、平成19年度には5名、平成20年度には9名の教育実習生を受け入れた。事前指導・実習（2週間ないし4週間）・事後指導を行う。事前指導・事後指導は、庄籠（副園長）と実習主任が1時間ずつ講義を行う。実習期間中は、担任・副担任が毎日保育後に反省会を開いて指導する。実習日誌に実習生が毎日「環境構成」「幼児の活動」「保育者の援助」「考察及び反省」等を記入し、担任と庄籠が所感を書き入れる。

また、「子ども観」と「保育者観」を実習前と実習後に書くレポートの提出を求めている。実習によって自身の成長が自覚できるようにするためである。

担任・副担任の毎日の反省会での指導助言も大きな役割を果たしているが、日誌に書く担任や庄籠の所感や事前指導の講義が実習生の学びに繋がっていると感じられた。そこで、所感や事前指導のどのコメントや言葉が実習生の学びに有効であったのかを、実習日誌やレポートから検証した。そして、特に学生の変化を思わせる6つのエピソードを取り上げ考察した。

<sup>1</sup> 佐賀大学 文化教育学部附属幼稚園（副園長）

<sup>2</sup> 佐賀大学 文化教育学部 教育心理学講座（同附属幼稚園園長）

## 2. 6つのエピソード

エピソード1. 「～させる」一幼児を上から目線で「～させる」のは保育ではないと伝えたくて—  
〈Aさんの場合〉

平成18年度に受け入れた実習生Aさん（3歳児クラスに配属）と担任・庄籠は、実習日誌の中で、次のようなやりとりをした。

実習日誌の1日目「保育者の援助」欄 実習生Aさん（下線は庄籠）

- ・コロコロができない子がいると、「上手な子がいたよ」と言い、教えるように促す。
- ・着替えるのが遅い子には、補助をする。どうしても着替えようとしない子には競争させる。
- ・〇～〇の形を園庭に描き、走ってきてじゃんけんをするように促し、保育者も参加し、見本を見せる。子どもたちが流れを理解したら、じゃんけんのかけ声をかけたり、走るタイミングを教えたり、補助をする。
- ・「〇〇の紙芝居があるよ」と片付けのあとに楽しみがあることを伝え、意欲的に片付けができるようにする。

実習日誌の1日目「考察及び反省」欄 実習生Aさん

今日、担任の先生の子どもたちとの関わりを見させていただき、子ども自身に考えさせようとしたり、子ども同士で解決し、教え合うように促していたり、という姿勢を感じた。

実習日誌の1日目「指導者所感」欄 担任

私達が〇〇させようとか、指導して子どもを思うように動かすのは、保育の本当の目的ではないし、私自身の保育がAさんにそううつったとしたら、私自身もよく考え直さないといけないですね。

実習日誌の1日目「園長・副園長所感」欄 庄籠

私は、子どもたちに「～させる」というのは好きではありません。「促す」もあまり好きではありません。

上から見て、「～させる」とか「指導する」とか「促す」のではなく、共に喜んだり悲しんだりして、一緒に日々の暮らしを楽しみながら、子ども達の中から芽生える素敵な所を喜んでいきたいというふうに感じています。

実習日誌2日目「考察及び反省」欄 実習生Aさん

昨日の先生方の所感を読み、実際に保育をしてみて、自分の中に無意識に小学校の気分があり「指導」をしようとしてしまっていたことに気付いた。

実習後レポート 実習生Aさん

2週間の教育実習を終えて、私の中の「保育者」のイメージは変わりました。実習前、私は「保育者」のイメージとして、小学校や中学校の先生と同じように「指導」したり、「〇〇をさせよう」としたりするもので、今日「教えたこと」があるものだと考えていました。しかし、先生方のお話を聞き、実際に子どもたちと接することにより、保育者は、指導をするものではなく、子どもたちと同じ目線に立ち、子どもたちの遊びの中に入って行くものであることがわかりました。そして、もし、子どもたちにこうなってほしいという願いが保育者側にあった場合には、保育者が「こうしましょう」と先頭に立ち、させようとするのではなく、子どもたちが自主的にその活動を始められるよう、保育者が環境を整えてあげるもので、私のイメージとは全く違うものでした。

また、私は「保育者」は、子どもたちにさまざまな経験を与えるなど、子どもたちに「してあげる」ことが役目であると、実習前は考えていました。しかし、実習の中で私は子どもたちに何かを与えるというよりも、子どもたちから感動や、自分の考え方を変えるチャンスをもらいました。今は「してあげる」のではなく、保育者も子どもたちと一緒に成長しながら保育をしていくものだと思っています。

〈Bさんの場合〉

同じく平成18年度の実習生Bさん（4歳児クラスに配属）とは、実習日誌の中で、次のようなやりとりをした。

実習日誌の1日目「保育者の援助」欄 実習生Bさん（下線は庄籠）

- ・仲直りをする時には手を出した方の子にもきちんと理由を聞いた後に「ごめんなさい」を言うようにさせる。

・静かに集中できるように歌を歌わせる。

実習日誌の1日目「考察及び反省」欄 実習生Bさん（下線は庄籠）

自由に遊ぶ場面では、それぞれ遊んでいる事を支えてあげる、またはアドバイスをしてあげることが大切だとわかりました。

実習日誌の1日目「保育者の援助」欄 担任

「ごめんなさい」を言うようにさせるの部分にアンダーラインを引き「何が悪かったのか考える場を設ける」と担任が書き入れている。

実習日誌の1日目「園長・副園長所感」欄 庄籠

中学校の実習を終えてすぐ幼稚園、しかもご自分が過ごされた幼稚園とずいぶん違うということで、戸惑われていることと思います。「～させる」「～してあげる」という表現は、私は使いません。いっしょに歌う、いっしょに遊ぶ…その中で、さりげなく支えるって感じかな。上から見たり、上からものを言ったりせず、ともに暮らしていくって感じかな。

実習日誌最終ページ「教育実習を終えて（感想と反省）」欄 実習生Bさん

私は幼稚園と小学校両方に興味があり、実習を通してその違いを知りたいなあと思い幼稚園実習を決めました。しかし年齢は低学年ならあまりかわらないし、同じ何かを学ぶ場としては違いはないのではないかというのが本音でした。しかし実際に来てみると、自分が通っていた幼稚園とは異なっていて少し戸惑ってしまったのも事実でした。そして、心のどこかで子どもたちに対して自分は何かをしてあげなければならないという考えがあったことに気付きました。なかなかそれをなくすことは難しかった部分もあったのですが、日にちが経ち毎日子どもたちといろいろな遊びをしたり、話をしていくなかで自分自身が考えさせられること、気付かされることが増えていき、最初に先生方が言われていたことがわかってきたように感じました。また、これまでの自分の考えが何だか偉そうに感じ、恥ずかしくも感じました。

### 〈Cさんの場合〉

実習後のレポート 実習生Cさん（3歳児クラスに配属） 19年度

保育者については、教育実習に来てから「保育者＝援助する人」という思いが強くなった。教育実習の事前指導で「～してあげる」という考えはなくしてほしいというお話があった。教育実習前は「保育者＝子どもの世話をする人」というイメージがあったため、お話を聞いても理解できなかった。しかし、先生方を見ていると、「世話」より「援助」という言葉が合っていると思うようになった。先生方は、子ども達の遊びに必要なものがあればすぐに用意し、トラブルが起きれば子ども達に寄り添っておられた。常に、子ども達の気持ちや遊びが主体となり発信源となっていて、保育者は子ども達を陰で支える、まさに縁の下の力持ちという感じだった。

### 〈Dさんの場合〉

実習後のレポート 実習生Dさん（3歳児クラスに配属） 19年度

「子ども観」「保育者観」については実習が終わっても実習前に書いたような、「子どもは小さな大人ではない」や、「保育者は教育者である」などということで大体あっているかなという感じがした。しかし、保育者の子どもへのかかわり方については実習前と実習後では考え方が違っていった。

実習前は確かに「子どもと保育者は同等で…」というようなことを書いてはいたが、それでも子どもを導いていくという表現を使っており、この導くという表現は私の中ではどっちかということ、子どもに“教えてあげる”とか“やってあげる”それこそ“～させるために”というような、子どもを上から見下ろしているような意味合いが含まれていたと思う。そのため子どもは将棋の駒ではない<sup>1)</sup>と理解しているつもりでも、幼稚園の指導案や日誌を書く際も“～させる”などの表現を使っていたのだろう。やはりそれには小学校や中学校の実習をする中で、指導案を書く際“～させるために～する”などの書き方をするのが関係していて、その考え方が当たり前だという感覚が自然になっていたのかもしれない。ところが、実際幼稚園の中に入って実習を行う中で、その上

から目線の考え方を捨てなければいけないと改めて考えさせられたし、いかに自分が子どもを上から見ていたかということについて気づかされた。

させることはある意味簡単である。体の大きな大人が小さな子どもを動かすのだから方法はいくらでも考えられる。しかし、そのことが果たして子どものためになるだろうか、と考えるとそうではない。そのように力で押さえつけられて育った子どもは、自分の考えを言うことができず、それだけではなく考えることすらできない大人になるかもしれない。このように子どもの将来のことを考えると、大人の都合のいいように子どもをさせるということが、いかに傲慢な考え方であるかということに気付く。子どもは小さな大人ではないが動物(ペット)でもないのである。

では、実際に保育者はどのように子どもとかかわっていくのかということ、私が実習を通して感じたことは、とにかくまずは子どもと一緒に何かするということである。それは遊びだったり、トラブルがあったときの話し合いだったり、様々なことが考えられるが、子どもの気持ちになって子どもに寄り添って、一緒に笑ったり、一緒に悩んだりすることが大切なのかなと思った。

しかし、ただ子どもと一緒に何かをするだけ、ただ子どもの目線に立つだけでは保育者とはいえないと思う。ただ楽しく遊ぶだけだったら近所のおじさんにもできることである。そうではなく、保育者は子どもと共に楽しみながらもその先の先、それこそ子どもの将来のことを考え、子どものとる行動に疑問を持ち、その奥の奥を見ようとする大人の目線をもっていなければいけないと思う。つまり保育者は、子どもと一緒に楽しめるような子どもの目線と、保育者のプロとしての専門的な目で見える大人の目線の両方を使って子どもとかかわっていくことが必要なのだと思う。そして最後に子どもとかかわる際に、保育者としての強い願いを持っていることも必要なことだと思う。それは子どもに押し付けるためではなく、自分の保育のあり方がおれてしまわないためのもので、これは幼稚園でも小学校・中学校でも、どの教育者でももっていなければいけないものである。

### 〈Eさんの場合〉

実習日誌「教育実習を終えて(感想と反省)」欄 実習生Eさん(3歳児クラスに配属)20年度

2週間の実習を振り返って、自分自身が実習前と変化したところを考えると、ひとつは子どもたちに何かを「してあげる」という言葉が、とてもおこがましいものを感じるようになったことです。

### エピソード2. ケンカも学びの場—ケンカの中で人間関係を学んでいると知って欲しくて—

#### 〈Bさんの場合〉

実習日誌2日目「保育者の援助」欄 実習生Bさん(4歳児クラスに配属)18年度

・けんかがおきないように、すもうの勝負を引き分けにされていた。

実習日誌2日目「考察及び反省」欄 実習生Bさん(下線は担任)

今日は他クラス参観ということで3才さんと5才さんを見たのですが、トラブルの内容と色々な点で違いを感じました。年齢が上がるにつれて自分達で解決できる内容も増えていっているように感じました。

実習日誌の1日目「保育者の援助」欄 担任

トラブルの貴重な場面に出会えてよかったですね。トラブルは、幼児同士の思いと思いのぶつかりあいですから、真正面からぶつかる経験で、大切だなといつも感じています。下線のように幼児の実態に合わせながら自分達で解決できるようにトラブルを支えていくことは、その子の成長につながるのではと思います。

実習日誌の1日目「園長・副園長所感」欄 庄籠

「けんかがおきないようにしよう」とは、うちの先生たちは考えていないと思います。けんかは、人間関係を学ぶ大切なチャンスです。おおいにけんかして、悲しかったり、くやしかったり、泣かせてしまって胸が痛んだりして成長して行って欲しいと考えています。

実習後のレポート 実習生Bさん

トラブルなどがあつた際には、しばらく幼児たち自身でどのようにして解決しようとするのか見守ることも大

切だと感じました。どうしても私たち大人は、トラブルがあったときには仲裁をしようとしたり、少し危ないことをしていると、「怪我をするよ」と、つい口を出してしまいます。けどそれでは、この次問題が起きた時に解決できないし、そのとき身をもって体験したことのほうがずっとその子の心にも頭にも残るのだと思ったからです。ひやひやしたり、もどかしいこともあったのですが、少しだけ見守り子どもたちの様子を見て必要な際に手助けをするというのが理想だということがわかった気がします。つまり保育者には、「体験する場を設ける」ということも必要なことの一つとしてあげることができるのではないかと思います。

### 〈Fさんの場合〉

実習日誌14日目「考察及び反省」の欄 実習生Fさん（3歳児クラスに配属） 18年度

最近、子どもたちが自分の考えや気持ちを表に出せるようになってきたのかなと感じる一方、トラブルが起きることが多くなってきたなと思いました。「仲間に入れて」と言っても入れてもらえなかったということが多くあったので、保育者が一緒になって遊びに参加したり、なぜ仲間に入れられないのか理由を聞いたりして、一緒に遊べるような援助が必要かなと思いました。

実習日誌14日目「指導者所感」欄 担任

「仲間に入れてー」と言っても「いいよ」という返事が返ってこないときも多くなってきました。それは、私は子ども達のひとつの成長だととらえています。それぞれに役割をもって遊んでいる場合、別の人が入ってきて、はじめから役を決めなおしたり、雰囲気がかわれてしまったりしていやなのでしょうね。けれど、2回3回と言われると、どうしてもその遊びに入りたい友達の存在を感じて、「そんなに言うなら…」と折り合いをつけられるようになってきているんでしょうね。どちらの気持ちも大切にしたいと思います。

実習日誌14日目「園長・副園長所感」欄 庄籠

子ども達がもめると、ついあせってしまいますよね。けんかせず、穏やかに遊んで欲しいと思ってしまいます。だけど、最初から絵に描いたように上手には遊ばせん。トラブルを起こして、本当に悔しかったり、悲しかったり、嬉しかったりして…その積み重ねの上に、少しずつ折り合いをつけることを学ぶのですね。けんかしたり、もめていたら、「おーおー、学んでいるな」とドーンと構えて見守ることができるよになるといいですね。

実習日誌15日目「考察及び反省」欄 実習生Fさん

何となく、トラブル=喧嘩=悪いこと？という印象があったのですが、担任の先生・庄籠先生の所感を読んで考えが変わりました。トラブルがあるからといって、子どもたちの仲が悪くなっているのでもなく、ふと見ると、すぐに笑って一緒に遊んでいる姿を見ます。明日は、とうとう研究保育ですが、トラブルが起きたりした場合、「学んでいるな。成長しているな」と思いながら、子どもたちとかわっていきたいと思います。

実習日誌最終ページ「教育実習を終えて（感想と反省）」欄 実習生Fさん

トラブルについて、あまりいい印象を持っていなかったのですが、子どもたちが学んでいる、成長しているのだと分かって、考えが180度変わりました。トラブルが起こる度に、チャンスと思って見守ったり、間に入って関わることができるようになってきたなと思います。

### 〈Gさんの場合〉

実習後のレポート 実習生Gさん（5歳児クラスに配属） 18年度

実習が始まって、子どもたちと一緒に遊んでいくうちに、トラブルにも遭遇するようになりました。その度に、どうして良いのか分からず、硬直してしまいました。トラブルを見かけると、気が引けるような思いがしました。“何か解決につながるようなことを言わなければ…”とか、“自分が解決してうまくまとめなければ…”という思いがあったからかもしれません。しかし、先生方に色々教えて頂いたり、先生方のかかわり方を何度も見させて頂くうちに、大切なことは解決することではないと分かりました。大切なことは、“子どもたちと一緒に考えること”でした。自分が解決してまとめるのではなく、子どもたちと一緒にどうすればいいのか考えていくのです。それから、両方の子どもたちが、対等に自分の思いや言い分を主張できるような雰囲気づくりをしていくこ

とも必要なことだと学びました。実際に何度か遭遇しましたが、一人対複数という状況では、一人の子どもは自分の思いを相手に伝えるににくいからです。また、みんなで集まっている時にトラブルがおきたら、それを全体に広げていって、みんなで考えることもできるのだと知りました。トラブルを成長のための良いチャンスなのだとプラスに捉えていく姿勢が、保育者にとって大切なことなのだと感じました。

### 〈Eさんの場合〉

実習日誌「教育実習を終えて（感想と反省）」 実習生Eさん（3歳児クラスに配属） 20年度

私はけんかやトラブルが起きたときは保育者である自分が仲介をして解決をしてあげなくてはと考えていました。それは子どもたちだけではけんかやトラブルを解決することができないということが前提にあります。「けんかしないでみんなが仲良く遊ぶこと」これがとても大切なことでトラブルは起きない方がいいと考えていました。しかし、事前指導・実習を通して、それは保育者・大人にとって都合が良いということなのかなと考えるようになりました。事前指導ではけんかは学びの宝庫であり、人間関係の基礎を学ぶもので、保育者は裁判官にはならないと聞いてとても驚きましたが、実習初日のできごとで驚きが納得に変わりました。誰が最初に車に乗るか3人でもめたときに、初めは「変わりばんこにしようか」と私が提案してみるも、みんな最初に乗りたくてゆずりません。「どうしたらいいかな」と問いかけると、次々に提案が出てきて最終的にはみんなが納得する形で協議が終わりました。私がこうしようと思わなくても子どもたち自身で、ああでもない、こうでもない、「どうしたらよいか」を考え、決定していく姿に、保育者ができることはじっくり待って見守ることなのかなと感じました。

エピソード3. 楽しく遊ぶこと一まずは、子どもと無心になって遊ぶのが保育の基本だと伝えたくて—

### 〈Aさんの場合〉

実習生Aさんと担任・庄籠は、次のようなやりとりもした。

実習日誌1日目「考察及び反省」欄 実習生Aさん（下線は筆者） 18年度

反省の際に伺った転んだ子どもへの対応では、子どもたちの成長を知っておき、子どもの気持ちを知らうとしなければいけないと思いました。

実習日誌1日目「指導者所感」欄 担任

子ども達に寄り添うこと・子ども達と共感することを実習の中で心がけていきましょう。子どもはとても誠実ですから、保育者という大人（子ども達にとっては家族以外で頼れる唯一の存在です）を、誠実に、その心根を写しとっていくように思っています。

実習日誌1日目「園長・副園長所感」欄 庄籠

まずは子どもと同じ目線になり、自分の中の子どもと共に子どもと遊ぶことを楽しんでみてください。その上で、困ったことが起きたら、どうしたらいいか、子どもといっしょに悩んで工夫してみてください。この2週間、やわらかい心で、子どもと楽しみながら保育の心にふれてください。

実習日誌2日目「考察及び反省」欄 実習生Aさん

今日は、保育補助を行ったが、とても反省の多いものだった。戸惑ってしまう場面が保育の中であり、反省会で先生方のお話を伺い、私がまだまだ子どもたちに寄り添おうという気持ちが足りなかったことに気付いた。…「子どもたちと楽しく遊ぼう」という気持ちを忘れていた。明日からは一度気持ちを真っ白にして保育に臨もうと思う。

実習日誌2日目「指導者所感」欄 担任

実習2日目での保育補助だったので、子ども達の中へ入っていく時に少しとまどわれていたように感じましたが、泥あそびや砂あそびをはじめた時には、保育者も一緒になって遊ぶことで、子ども達が何に楽しさを感じているかが伝わりやすくなると思いますので、ぜひやってみてください。Aさんは声が大きくてはっきりしているので、遠くの子どもにも伝わりやすいと思います。実習中には、子ども達と「楽しい気持ち」をたくさん共感で

きるように努めてくださいね。

実習日誌2日目「園長・副園長所感」欄 庄籠

子どもたちと楽しもうと思われたとのこと、素直に先生の話を受け入れて、自分を変えようと思われた、その柔らかい心がすばらしいですね。子どもたちも喜ぶでしょう。楽しみにしています。

実習日誌3日目「考察及び反省」欄 実習生Aさん

今日は、自由活動の部分保育と、保育補助を行いました。昨日の反省から、「子どもたちと本当に楽しんで遊ぼう」と考えていたので、子どもたちの輪の中に入り込んでいると、本当に楽しくなり、昨日より子どもたちに自然に接することができていた気がしました。昨日は、「どう子どもたちに声をかけたらいいだろう」と考えてしまい、子どもたちとうまく話せませんでした。今日は自分でも不思議なくらい楽な気持ちで子どもに接することができました。先生方が言われた保育の中で楽しさを共感することの大切さを感じました。

〈Hさんの場合〉

実習日誌1日目「考察及び反省」欄 実習生Hさん（5歳児クラスに配属）20年度

こちらが壁を作ると、必ず子どもも壁を作るので、素直な気持ちで接したい

実習日誌1日目「指導者所感」欄 担任

これは大切なことです。自分の今までの概念みたいなものから『出て』、子ども達と『逢う』ということです。素直な心で子ども達によりそってみて下さい。明日からHさんと子ども達の『出逢い』がとても楽しみです。基本は『子ども達と楽しむこと』、わからなくなったら『子どもに聞く』ということです。

実習日誌最終ページ「教育実習を終えて（感想と反省）」欄 実習生Hさん

私は幼稚園にボランティア等でも行ったことはなく、幼稚園児と遊ぶ機会が全くありませんでした。なので、実習が始まる前は、不安に思う気持ちの方が、楽しみだと思える気持ちよりも大きかったです。その不安が行動や言動に出てしまっていたと思います。実習が始まってすぐは、なかなか、子どもたちと一緒に楽しく遊ぶという最も大切なことができていなかったように思います。子どもたちは、実習生に興味があるようで、にこにこしながら「遊ぼうよ」と言ってきてくれたり、色々な物を持ってきて見せてくれたりしました。しかし、私はそこで急に緊張してしまい、ぎこちない対応をしていたのかもしれない。他の実習生の先生の方が好きなかなあと思うような場面もありました。しかしそれは、私が子どもたちに対して厚い壁を作っていたからでしょう。その時は決してそんなつもりはなかったのですが、今、振り返ってみると、私は子どもたちとの間に自ら距離をとっていたなあと思います。先生からも「H先生はいつも子どもたちを冷静に見つめています、笑顔がない」という指摘をいただき、それをきっかけに「変わろう」と思いました。しかし、笑顔というものは本当に楽しんでいないと出来ません。私は、なるべく子どもと同じ目線で、積極的に遊びに参加しようと努めました。すると、子どもたちの私に対する態度が変わったのです。私を「仲間」と認めてくれたかのように、私は感じました。私が「子ども達と遊ぶのって、何て楽しいんだろう」と思いながら遊ぶことができるようになると、子どもたちも、本当に楽しそうでした。心から楽しいと思って笑顔で遊んでいると、周りの子どもたちも寄ってきて遊びが展開することもありました。子どもとの信頼関係が成立して初めて遊びも成立するのだということを知りました。

〈Iさんの場合〉

実習後のレポート 実習生Iさん（5歳児クラスに配属）20年度

私は、まず子どもと無心になって遊ぶことに専念しました。とにかく体を思いっきり使って、走り回ったり、一緒に汗をかき、一緒にはらはら感を味わったりしました。そこで、自分は子どもが好きだということ、そして子どもと遊ぶことがとても楽しいなということを感じました。その経験は本当によかったなと思いました。そういう遊びから、少しずつ子どもとの信頼関係ができていったような気がします。自然に笑顔ができたこともよかったなと思っています。

## エピソード4. 怪獣ごっこの怪獣役—子どもをからかうのは保育ではないと伝えたくて—

## 〈Jさんの場合〉

実習生Jさん（4歳児クラス配属、19年度）が怪獣ごっこの怪獣役になって遊んでいたのですが、保育後の事後指導で「怪獣ごっこのエピソード」を語った。Jさんはとても驚いた。

庄籠の怪獣ごっこのエピソード<sup>2)</sup>

庄籠が大学2年生時、附属幼稚園に行って子どもと触れるという実習があった。私の配属は3才児のクラスであった。何日目かに遊んでいると怪獣ごっこになり、私が怪獣役で、何人もの子どもと戦った。盛り上がり過ぎて楽しかった。しかし、保育後、担任は私にこう言った「おじさんが姪っ子や甥っ子と遊ぶように、子どもをからかうように遊んではいけません」。翌日、遊んでいると電車ごっこになり、私は乗客の一員となり、切符を買ったり、切符を切ってもらったり、大型積み木の電車に乗り込んだりした。保育後、担任は「今日のあなたはよかったわよ」と言った。30年経っても忘れられないエピソードである。

怪獣ごっこのエピソードを聞いたJさんは、首をかしげ、「どうして怪獣役をしてはいけないのですか？」と尋ねた。庄籠が「保育者が抜けたら、その遊びが続かなくなるでしょう」と言うと、「あっそうですね」と、とても納得したようであった。

Jさんの実習後のレポートには次のように書かれていた。

子ども観と同様、保育者観も実習前とは大きく違った。危ないことや悪いことをしたら真っ先に叱ったり、保育者からあーしなさい、こうしなさいと言うようなイメージを持っていた。しかし、実際は保育者ではなく子どもが主体になって遊んだり行動するというものであった。保育者観が変わった。庄籠先生がおっしゃった怪獣ごっこの話のように保育者が怪獣となって子ども達を追いかけまわすのではなく、保育者がその遊びから抜けてもまだその遊びが続いていくようにかかわることが大事である。また、できない部分では援助し、お互いに楽しみながら子どもとかわかっていく。それが保育者というものだということが4週間の実習で感じたことである。

## 〈Kさんの場合〉

実習生Kさん（4歳児クラス配属、19年度）は、「怪獣ごっこのエピソード」を聞き、レポートにこう書いている。

「保育者」と「おねえちゃん」の違いについて考えていました。その違いをつかめたように感じます。「保育者の接し方は、親戚のおじちゃんの怪獣ごっこであってはいけない」というものでした。怪獣ごっこでは怪獣となり追いかける大人が主役になってしまいます。一方、保育者としての接し方は、幼児と一緒に遊んで遊び、楽しみ、且つそのなかで援助し育ちを見守ることが基本です。具体的に考えることで、この違いが自分の中に入った。幼児教育が幼児の社会性を育てるだけでなく、プロの職業として存在する理由のひとつはこの接し方にあると思います。また、同じ内容を伝えるとき、相手にすっと入る言葉があること、そして具体性が理解を深めることを実感しました。

## エピソード5. 「おりこうさん」という言葉

—期待される人間像を演じる子どもを作ってはいけないと伝えたくて—

事前指導の中で「幼稚園では『おりこうさんね』なんて言わないで欲しい」と話した。事前指導を受けた実習生の何人もが日誌の事前指導のページに「驚いた」と書いていた。

## 庄籠の「おりこうさん」のエピソード

小学校の先生が本園に赴任した。3才児クラスの一入園の降園時、椅子に座って先生を見つめる子ど



も達を前に、先生は「おりこうさんねー」と2回言った。保育後、私はその担任に「幼稚園は『おりこうさん』を作るところではないから『おりこうさん』なんて言葉は使わないでね」と言った。私にとっては当たり前のことであったが、担任は驚いたのだと後で聞いた。自分を出せないまま、大人の期待に添って生きてきた子どもが起こす悲劇の物語を聞いている私は幼稚園は子どもの本音を育まなくてはいけない、大人の期待に添う「おりこうさん」を育ててはいけないと思っている。

### 〈Lさんの場合〉

実習日誌「事前指導」欄 実習生Lさん 20年度

…私は、小学校から来た先生が「おりこうさん」と言ったことを庄籠先生がおかしいと思ったことが、なぜだか分かりませんでした。私も幼稚園の子ども達がきちんと先生の話聞いていたら「お利口だね」と言うだろうと思ったからです。その後その理由を話されました。「お利口さん」という言葉には、大人の期待にそうというニュアンスが入っていて、先生の考えでは、大人の期待している様にしようとして子どもが思って行動するようになってほしくない、自分がどうしたいのか、何をしたいのかというものを大事にしてほしいということでした。この話を聞いて考え方が変わりました。今まで私は、大人の言うことを聞く、聞き分けの良い子=良い子と思っていましたが、考えてみるとかわいそうなことだと思いました。子どもたちには自分のしたい事を、自分の思いのままにしてほしいと新しい視点からそう考えるようになりました。

### 〈Mさんの場合〉

実習日誌「事前指導」欄 実習生Mさん 20年度

この事前指導の間でも「なぜ？」が「なるほど!!」に変わった瞬間があった。初め、静かに座って先生のお話を聞こうとしている子どもの姿を“お利口さん”と表現することに「それは変だな」とは少しも思わなかった。しかし、庄籠先生のお話を聞いて、その時の子どもの気持ちと“お利口さん”という言葉の意味をよく考えてみたら「なるほど!! “うれしいわ”」と自分の気持ちを素直に表現する方がよかったんだと思った。

### エピソード6. 「ダメ」と言わないで

—子どもの本音を育てて欲しくて・対等な生命として真摯に向き合って欲しくて—

子どものすること・言うことに「ダメ」と言うことは上から見ていることである。上から見るとはなく、「そんなことされたら、私、悲しいな」「痛いから、やめて」というように対等な生命として真摯に向き合って欲しいと事前指導の中で話した。

### 〈Nさんの場合〉

実習日誌「事前指導」欄 実習生Nさん 20年度

今回の事前指導を受け、かなづちで殴られたかのような衝撃を受けました。これまで私は子どもたちと同じ目線にいるような気でいたけれど、「だめ」や「おりこうさん」という言葉をよく使っていました。確かにこの言葉には、自分が上になつているような意味を含んでいるように思います。それに、「だめ」という言葉を使うと、その先の言葉がないような気がします。子どもたちが「これはだめなことなんだ」と感じるのではなく「これは、こうこうだからだめだと思う」と自分で考えることが大事なのだと学びました。

実習後のレポート 実習生Nさん

「だめ」という言葉を使わないでほしい。そう指導を受けてから、最初はただ「だめ」という言葉を使わないことだけを考えていた。でも、どうしても伝えるのが難しい。子どもたちとのかかわりの中で何度も「だめ」という言葉が喉まででてくるといふ経験を重ねていくうちに、自然と「では、何で使ってはいけないのだろう?」と

の考えを深めることになった。子どもたちは、ただ「だめ」と言われても「〇〇＝だめ」という概念しか得られない。この＝で結ばれた概念だけでは、子どもたちの心には深く入ることはないのではないだろうか。

では、どのようにすれば、子どもたちの心へと入っていくのかを考えたときに、子どもたち自身が考えるという階段を設けることの必要性がでてくる。それに伴って、子どもたちが「～だから」と考える階段を経て、自ら「だめ」という判断をするということが大切になってくる。だから、保育者は、子どもたちが「～だから」と考える手伝いをする必要があるのではないだろうか。そう考えると、段々と、「だめ」という言葉を使おうとすることも減っていった。

また、子どもたちが考える過程で、「先生は、とっても悲しかった。とっても痛かった。とっても嬉しかった。困ったなあ」と感情を気持ちを込めて伝えることも多くなっていった。「そっか。〇〇くんはこんな気持ちなのね。でも、〇〇くんはこういう気持ちだったのね」と話をよく聞いて、整理した上での「じゃあ、どうしたらいいんだろう」などの投げかけも増えた。

すると、ただ「だめ」とだけ言われた時の子どもの表情とは全く違う顔が見られるようになった。また、言われたのではなく、子どもたちの心からでてきた「ごめんね」や「ありがとう」という言葉が聞かれるようになった。

### 3. 考察

上垣内<sup>3)</sup>は、5年目・10年目の保育者に、自らの日案等をもとに、1年目と現在の「保育者」「子ども」のイメージの変化を綴ってもらっている。1年目は「～させる」「～してあげる」などの記述が多く「(子どもより)1つ高いところで子どもをどうまとめるかを考えていた」と振り返る保育者がいる。上垣内は「(この保育者は)保育者と子どもの関係を、育てる立場の保育者が育つ存在である子どもの上位に位置し指導するという、垂直な上下関係としてとらえている」、「(これは)実習生や経験の浅い保育者に比較的多く見られる」と述べている。「(その保育者たちが5年・10年たつと、)大人(先生)－子ども、教える－教えられる、育てる－育つという固定的で垂直な関係から、役割は異なっても真剣に自ら生き自ら育とうとする人間であることにおいては対等な関係であることへ認識が変化してきている」と述べている。

平成18年度に本園に着任し、教育実習生を受け入れ、実習日誌を読んだ庄籠は、「～させる」「～してあげる」と何人もが書いていることに気付いた(エピソード1.)。また、「けんかがおきないように」など、子ども達のけんかやトラブルを起きてはいけないうことと捉えているようなので、けんかやトラブルを通して人間関係を学んでいるのだと伝えようと試みた(エピソード2.)。そして、「子どもの気持ちを知ろうとしなくてはいけない」、「どのような声かけをすればいいか」など、理詰めで子どもと関わろうとしているのが感じられたので、まず理屈抜きに子どもと同じ目線に立って遊ぶことを楽しみ、心も身体もしなやかになって、保育を感覚として身につけてもらう必要を感じた(エピソード3.)。

そこで庄籠らは、次のような言葉を所感欄に書き込んだ。「指導して子どもを思うように動かすのは、保育の本当の目的ではない」「『～させる』とか『指導する』とか『促す』のではなく、共に喜んだり悲しんだりして、一緒に日々の暮らしを楽しみながら、子ども達の中から芽生える素敵な所を喜んでいきたい」(エピソード1.)、「トラブルは、幼児同士の思いと思いのぶつかりあいですから、真正面からぶつかる経験であり、大切だなといつも感じています」「けんかは、人間関係を学ぶ大切なチャンスです」「トラブルを起こして、本当に悔しかったり、悲しかったり、嬉しかったりして…その積み重ねの上に、少しずつ折り合いをつけることを学ぶのですね。けんかしたり、もめていたら、『おーおー、学んでいるなー』とドーンと構えて見守ることができるようになるといいですね」(エピソード2.)。また、身体を使って楽しく遊ぶことで、保育を理屈ではなく感覚でつかむことが効果的であると考え、「まずは子どもと同じ目線になり、自分の中の子どもと共に子どもと遊ぶことを楽しんでみてください」などとアドバイスした(エピソード

3.)。

上述のようなアドバイスを読んだ実習生たちは、次のような言葉を書き記した。『子どもたちと本当に楽しんで遊ぼう』と考え、子どもたちの輪の中に入り込んでいると、本当に楽しくなり、昨日より子どもたちに自然に接することができていた気がしました。昨日は、『どう子どもたちに声をかけたらいんだろう』と考えてしまい、子どもたちとうまく話せませんでした。今日は自分でも不思議なくらい楽な気持ちで子どもに接することができました」(Aさん)。「私は、なるべく子どもと同じ目線で、積極的に遊びに参加しようと努めました。すると、子どもたちの私に対する態度が変わったのです。私を『仲間』と認めてくれたかのように、私は感じました。私が『子ども達と遊ぶのって、何て楽しいんだろう』と思いがら遊ぶことができるようになると、子どもたちも、本当に楽しそうでした。心から楽しいと思って笑顔で遊んでいると、周りの子どもたちも寄ってきて遊びが展開することもありました」(Hさん)(エピソード3.)。

このような体験を振り返る言葉から、さらに幼児教育の本質に迫る言葉も記されるようになった。「先生方のお話を聞き、実際に子どもたちと接することにより、保育者は、指導をするものではなく、子どもたちと同じ目線に立ち、子どもたちの遊びの中に入っていくものであることがわかりました」(Aさん)。「実際幼稚園の中に入って実習を行う中で、その上から目線の考え方を捨てなければいけないと改めて考えさせられたし、いかに自分が子どもを上から見ていたかということについて気づかされた」(Dさん)(エピソード1.)、「(トラブルが起きた時)大切なことは、“子どもたちと一緒に考えること”でした」(Gさん)(エピソード2.)。また、「これまでの自分の考えが何だか偉そうに感じ、恥ずかしくも感じました」(Bさん)、「子どもたちに何かを『してあげる』という言葉が、とてもおこがましいものを感じるようになった」(Eさん)(エピソード1.)のように、理屈ではなく感覚として幼児教育を身につけたとわかる言葉も記されるようになった。

庄籠が実習生を受け入れた初年度は、Aさん・Bさん・Fさんのように日誌の中でやりとりをしたが、2年目からは、事前指導の中で、その話をするようになったので、エピソード1. 2. 3. のようなやりとりをするのは少なくなった。それゆえ、最初から、子どもと楽しく遊ぼうと心がける実習生が現れたり(Iさん)(エピソード3.)、事前指導の時には理解できなかったが、実習をしているうちにわかるようになったと書く実習生が出てきた。

また、小学校教育と同じようにすればいいと考えている実習生が多いように感じた庄籠は、小学校教育と幼児教育とは違う部分があるのだと伝える必要を感じた。そのためにはインパクトのある話をし、実習生の考え方に揺さぶりをかけるのがよいのではないかと考えた。保育学者である津守<sup>4)</sup>は「我々が知覚する子どもの行動は、子どもが心に感じている世界の表現である」と述べている。幼児教育では、小学校教育よりも、よりひとりひとりの子どもたちの心の表現を大切に、期待される良い子を演じるのではなく、まずは本音を表現することを大切にする。このことを伝えるべきだと考え、事前指導の中で「おひこうさん」という言葉や「だめ」という言葉は使わないで欲しいと話した(エピソード5. 6.)。びっくりした実習生たちは、実習をしながら、その意味を自分なりに考え、試行錯誤を続け、「ただ『だめ』とだけ言われた時の子どもの表情とは全く違う顔が見られるようになった。また、言われたのではなく、子どもたちの心からでてきた『ごめんね』や『ありがとう』という言葉が聞かれるようになった」(Nさん)のように体験を通して、保育の本質を学んでいった。

怪獣ごっこ怪獣役のエピソード(エピソード4.)は、庄籠が学生の時に実習先の指導教員から聞いた言葉であるが、その後30年間、幾度も繰り返し思い出してはその意味を問うてきた。「同じ内容を伝えるとき、相手にすっと入る言葉があること、そして具体性が理解を深めることを実感しました」とKさんが書いて

いるように、「からかって遊ぶのは保育ではありません」と言われてもピンと来ないが、エピソードを聞くと「なるほど」と思うことができる人が多いこともわかった。庄籠が私立幼稚園の主任研修会<sup>5)</sup>でこの話をした時も、「ああ、わかる、わかる」というような表情で大きく頷いている先生達がたくさんいた。このようなすっと入ってくるようなエピソードを用いることによって保育の基本的な考え方を伝えていくことが有効だと考えられた。

上述したように、保育者の言葉を学生に伝えることにより、学生に変化が生じることを見る事ができた。佐賀大学には幼児教育の主専攻がない。小学校教員免許を取得しようとする学生が副専攻として幼稚園教員免許を取得するケースが多い。このような学生は、小学校教育実習については多くの時間を費やして指導を受けるのであろう。しかし、発達段階が異なる幼児に対する接し方は、おのずと児童に対するそれとは異なる。今回の報告は、さまざまな年齢の子ども達に対応できる教員を養成するために、幼児教育の立場から、学生達に強いメッセージを送る試みを紹介することであった。本来なら、時間をかけて、学生達が自ら学んでいくことを望むべきであるが、限られた実習期間の中で習得できるよう、あらかじめ事前指導で方針を示さなければならなかった。効果的な実習を行うためには、実習期間についても考えていかなければならないと思う。

#### 4. おわりに

幼稚園教員養成課程を持たない佐賀大学における附属幼稚園の第一の役割は、小学校教員養成課程等で学ぶ学生に、小学校教育と幼児教育の違う部分・あるいはより丁寧にする必要のある部分を伝え、対象年齢の異なる子どもへの理解・対応力をつけ、教育力を高めてもらうことであると思う。今後も、幼稚園教育実習の中で、学生達が、より多くのことを学べるように工夫を重ねていきたい。

#### 謝辞

事前指導も実習期間も事後指導も、真摯な態度で筆者達の話聞き、一生懸命に日誌やレポートを書いていた実習生達。しゃがんで視線を合わせ、精一杯に園児達の気持ちに寄り添おうとしていた実習生達。実習生達のおかげで、筆者達職員にもたくさんの学びがあった。今は社会人となって、それぞれに活躍しておられることだろう。

「研究に使いたい」「実習日誌やレポートをコピーさせて欲しい」と筆者がお願いをすると、快く承諾してくださった実習生のみな様に心よりお礼を申し上げたい。

#### 註

- 1) 平成19年度の事前指導の中で「子ども達は将棋の駒ではない」と庄籠が説明した。
- 2) 昭和56年に、当時お茶の水女子大学家政学部児童学科2年生であった庄籠がお茶の水女子大学附属幼稚園に実習に行った時のエピソードである。担任は堀合文子、当時お茶の水女子大学附属幼稚園教諭。
- 3) 「保育者論—共生へのまなざし—」榎沢良彦・上垣内伸子編著 2004 同文書院 10~11ページ
- 4) 「保育の体験と思索」津守真 1980 大日本図書 5ページ
- 5) 平成21年4月2日佐賀県私立幼稚園連合会 主任研修会